令和６年度校内研究の実践報告

令和７年２月　研究推進委員会

１ 研究主題

ＩＣＴの活用による学習の個別最適化と協働的な学びの実践（一年次）
～主体的に学ぶ・話す・活かす生徒の育成～

２ 研究の方向性

（１）「個別最適な学習」と「協働的な学び」を授業の中核として実践していく。
（２）授業におけるＩＣＴ機器や先端技術の活用
（３）振り返り過程や具体的な成果を数値でとらえ、変容を次の学びに活かしていく。

３ 実践報告

今年度の研究成果については、３学期に教員全員に今年度の研究についてのアンケート調査を行った結果は以下のようになっている。

（　５　）①　とてもよい校内研究になった
（２０）②　よい校内研究になった
（　１　）③　成果はあったが、もっと違う形で行いたかった。
（　０　）④　あまり成果は得られなかった。

今年度は上記の研究の方向性を教員間で共有し、「生徒が主体的に学ぶ・話す・活かす力の伸長」をメインに研究を進めてきた。それに加えて、電子黒板やデジタル教科書などがここ数年で一気に導入されている現場の実態を考え、「ICT 機器の活用」という側面も盛り込んだ形で行った。研究の具体的実践として、１学期に教科で計画を立て、２学期に向けてそれぞれの教科での研究授業を行った。どの教科でも積極的に、そして効果的に ICT 機器を取り入れた授業を行うことができた。教科ごとに課題と成果を実感でき、来年度に向けた取り組みを考えるいい機会となったと感じている。

アンケート資料①　山形二中「生活状況調査」（全校生）より

授業で、PC・タブレットなどの ICT をどの程度使用しましたか?

1学期	ほぼ毎日	週3回以上	週1回以上	月1回以上	月1回未満
本校	32.0(16.8)	34.8(38.1)	27.4(33.6)	3.9(9.2)	2.0(2.4)
全国	31.0	33.4	24.6	7.8	2.8

2学期	ほぼ毎日	週3回以上	週1回以上	月1回以上	月1回未満
本校	41.8(32.0)	37.9(34.8)	16.5(27.4)	1.0(3.9)	2.6(2.0)
全国	31.0	33.4	24.6	7.8	2.8

（　）内は、昨年度同時期の結果

「ほぼ毎日」「週３回以上」使用している割合が増え、授業の中での ICT 活用頻度が向上した。学校の授業研究としては、生徒の資質・能力の向上はもちろん、我々教員としても授業力の向上を目指すものであるという視点から、機器の活用方法を能動的に身につけようという意識を共有できた。ただ、教科の特性を考えると、一概に ICT 機器の活用といっても教科や単元での向き不向きなどがあり、やりにくさを感じるという振り返りもあった。

また、研修として「電子黒板」「CBT テスト」「Qubena」の活用等について行った。教員のスキルアップはもちろん、それらを活用することにより、弱点を把握してその対策を行ったり、思考の流れを可視化したりしながら、生徒の理解や意欲の向上につなげることができた。「個別最適化」という観点では、CBT テストや Qubena を用いたことにより、生徒自身が自分のつまずきを確認し、自己調整を図りながら課題に取り組む姿があった。また、電子黒板などで授業を進めることで、生徒が説明する場面や生徒同士の交流時間を増やし、協働的な授業内容をつくることができた。生徒自身も ICT 機器を活用していく良さを実感できたと考えられる。

アンケート資料②　山形二中「生活状況調査」（全校生）より

学習の中で、PC・タブレットなどの ICT 機器を使うのは、勉強に役立つと思う。

1学期	95.1
2学期	94.7

ICT 機器を活用することで、自分のペースで理解しながら学習を進めることができる。

1学期	91.8
2学期	93.2

画像や動画、音声などを活用することで、学習内容がよくわかる。

1学期	94.9
2学期	94.6

ICT 機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができる。

1学期	93.6
2学期	94.2

今年度の学校研究全体を振り返ると、どの教科も実践結果の把握や生徒の状況確認を工夫し、研究の成果と課題を数値的にとらえようとする取り組みがあった。数値的な結果を出すことで、より個別最適で協働的な学習を行うことができたと感じている。また、生徒のつまずきを的確にとらえることで、生徒の資質・能力の向上につながったと考えている。そういった観点からも ICT 機器の活用による有効性を実感できた研究であったと思われる。

4　来年度の校内研究に向けて

今年度の研究の内容には、「教師の指導力向上と個別最適化された新たな授業スタイルの確立」という視点もあり、教科間の実践を全体で共有し、自分の授業に活かしていくという内容もあった。そのため、教科で行った研究授業を職員会議等で報告し、教科を越えて互いの授業実践に活かせるような「実践報告会の開催」も計画していたが、時間の確保ができなかった。「先生方がそれぞれされている工夫や、ICT の取り入れ方など、もっと情報がお互いに共有できるような研究にしてほしい」「生の授業をもっと見せていただき、また見ていただいて、ご指導・ご助言いただきたい」という先生方の意見もあった。来年度は、そういった時間を確保し、教科間の垣根を越えた研究も実現していきたいと考えている。

また、今年度の研究を進めていく中で、生徒のICT活用能力も課題となった。具体的には「プレゼンする力（発信、発表する力）がなかなか向上していない。」ということである。昨今の人工知能の発展により、「人がAIに勝るもの」が求められている。来年度からの高校入試においても「自分の考えをどう上手に相手に伝えていくのか」という力が重要になる。よって、探究的な学びに重きを置き、学んだ内容や課題意識をもって授業に参加できる姿を大切にしていきたい。自らが思考したことを聞き手によりわかりやすく伝える「ICT機器の活用による発信力（表現力）」という視点を研究授業に組み込んできたい。